

童謡詩人・金子みすゞに「土と草」という詩があります。
母さん知らぬ 草の子を、
なん千万の 草の子を、
土はひとりで 育てます。
草があああ 茂つたら、
土はかくれて しまうのに。

まがつた胡瓜じや
ダメなの?

お店には、いつも緑色の胡瓜が並べられています。どの胡瓜も真っすぐです。こんな胡瓜ばかり見て育った子どもたちは、胡瓜は真っすぐなものと思ってしまうのではないでしょうか。まがつたのや、ちっちゃな胡瓜だってあります。

ふつう実は熟して食べますが、胡瓜は未熟なまま食用とします。黄色く塾する前に食べる方がおいしいからですが、「未熟」がよいというのも面白く思います。人間の場合も、未熟だからこそ成長します。子供は未熟ですから、それだけ成長する可能性を多くもつていることを認めねばなりません。

ところが悲しいことに、大人たちは、自分の都合で子どもを「よい子」と「ダメな子」に分けてしまいます。だから子どもは、親や人の前では「いい子ぶる」とここになります。いろんな子がいていいはずなのに……。

『阿弥陀経』というお経のなかに、お浄土の蓮華(ハスのはな)は、青色には青い光り、赤色が奇麗だとか、白色はダメとかいうのではけつしてありません。どの華も、それぞれに光りかがやいています。つまり、まがつた胡瓜も真っすぐな胡瓜も、それぞれに価値があるように、一人ひとりの個性を認め貴ぶことを忘れてはなりません。



童謡詩人・金子みすゞに「土と草」という詩があります。
親鸞さまは、阿弥陀さまの慈悲のおこころは、大地や磁石のようなものだと喜ばれています。磁石がどんな鉄でも引きつけるように。大地はどんな植物も、選ぶことなく、育みます。大地はどんな植物も、選ぶことなく、育みます。親鸞さまは、阿弥陀さまの慈悲のおこころは、大地や磁石のようなものだと喜ばれています。大地はどんな鉄でも引きつけるように。

この詩をとおして、母なる大地の素晴らしいを感じずにはおれません。

大地はどんな植物も、選ぶことなく、育みます。親鸞さまは、阿弥陀さまの慈悲のおこころは、大地や磁石のようなものだと喜ばれています。大地はどんな鉄でも引きつけるように。

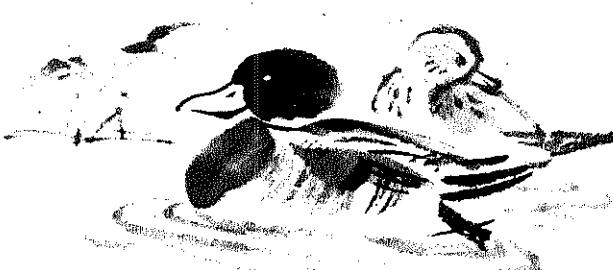


竜谷大学教授 海谷 则之

雀のかあさん 金子みすゞ

子供が 子雀 つかまえた。
その子のかあさん 笑ってた。
かあさん それみてた。

雀の お屋根で 鳴かずに それ見てた。



亡れていた大切なこと
「報恩講」

ここに高校三年の女生徒の作文があります。

夜の地下鉄に乗りました。座席に座って発車を待っていたとき、一人の作業服姿のおじいさんが乗って来て私の斜め前に座りました。その人は砂ぼこりを被ったのか、顔も作業服ももっているズックカバンも真っ白。しばらくしてそのおじいさんは、疲れていたのか、眠ってしまいました。

私は、かれの真っ白になつた手を見て、思わずわが祖父の手を思い出しました。祖父は土木の仕事をしており、いつも汚れた手で夕食を食べようとして、祖母からきまつて「手、洗つて!」と云われていた。しかし、わたしはその祖父の手が好きでした。毎日、私たち家族のために汗水たらして黙々と働いてくれる。土や泥で汚れた手に「男」を感じました。汚れではいるが、私にはそれが「奇麗」であり「輝いて」おり「格好よく」思えたものです。



私は今受験生。私の手はどうだ。あのおじいさんの手を見たとき、わが祖父の手を思い出したとき、今まで自分がなにも考えずにただボンヤリと生きて来たことを恥ずかしく思い、涙がこみ上げてきた。

☆

私は今受験生。私の手はどうだ。あのおじいさんの手を見たとき、わが祖父の手を思い出したとき、今まで自分がなにも考えずにただボンヤリと生きて来たことを恥ずかしく思い、涙がこみ上げてきた。

寺でも各家庭でも、これから次々に報恩講がおつとまりになる。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく接すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」

この私のために粉骨碎心。思惟と修行のすえ南無阿弥陀仏の呼び声となってこの私に今までに届いてくださっている。

この私のために、汚れ苦労してくださる光り輝く阿弥陀如来のお働きを、我が身の上に知ること。

そしてまたそこから、深い反省がうまれ、今の自分の生き方があきらかになつてくる。そのように勤めさせていただくのが報恩講ではないか。

私がさびしいときに、
よその人は知らないの。
お友だちは笑うの。
私がさびしいときに、
お母さんはやさしいの。
私がさびしいときに、
お母さんはさびしいの。